

第五章 闇司祭暴走

マリナ「……ん？ あれ、私……」

闇司祭「ようやく起きたわね。待ちくたびれたわ」

マリナ「……妹は？」

闇司祭「まだ実験が終わっていないわ。あなた、素晴らしい被検体だから色々試したいのよ」

【マリナ、身構える】

マリナ「そんな言葉、信じられると思ってるの？ これが終われば解放するって、何度言われても解放されないじゃない！」

闇司祭「あら怖い。いまから行う実験は、あなたも楽しめると思うんだけど」

マリナ「私が楽しめる実験なんて、あるわけないでしょ！ 寝言は寝て言いなさいよ！」

闇司祭「そう怒らないの。実験って言っても、あなたに快樂を与えるんじゃないのよ？」

マリナ「……快樂以外のなにかを与えるってこと？」

闇司祭「違うわ。あなたが私に快樂を与えるの」

マリナ「私が、あなたに……？ 意味のわからないことを言わないで！」

闇司祭「言った通りなのだけれど……困ったわね、信賴を失ってるわ」

マリナ「自分たちで失うような真似をしたからでしょ！」

マリナ（なにを考えているの？ この司祭は）

闇司祭「とにかく、あなたは私に従うしかないのだから、私に快樂を与えなさい。ほら、どこから来てもいいわよ」

マリナ「……医者とナースは？ あのふたりが隠れてて、途中から襲ってくるとかないわよね？」

闇司祭「ないわ。あのふたりにも言っていない実験だもの」

マリナ（とりあえず、言うことを聞いたほうがいいのかしら）

マリナ「……わかったわ。やればいいのかね」

闇司祭「そう。あ、ひとつ条件を出すわ。私に毒液を注入すること。これさえ守ってくれば、なにをしてもいいわ」

マリナ（あの薬を自分に注入させるの……？ やっぱり正気じゃないわ。完全に狂人の考えよ）

マリナ「……この器具で、いいのよね？」

闇司祭「ええ。中身は充填済みだから、好きなだけ使いなさい。できるだけ多く注入してくれたほうがいいわ」

マリナ（なんだかあとが怖いけど、やるなら徹底的にやるしかないわ。この薬の効き目は、散々注入された私がよく知ってるんだから）

マリナ「……じゃあ、始めるわ」

闇司祭「お願い。たんまり注ぐのよ。躊躇いはいらないわ」

マリナ（……やるのよ。こいつの身体が壊れたって知らないし、そうすれば妹と一緒に逃げられるかもしれないし……）

闇司祭「んっ……チンポにセットされちゃった。もう少し奥まで、注入口をねじ込んで」

マリナ「こ、こうでいいの？」

闇司祭「ああんっ！　そうよ、それくらい強引にねじ込んでから、ぶちゅううっつて注入するの」

マリナ「……注入、するわ」

闇司祭「んんっ♪　来てる来てるっ♪　尿道の中を、毒液が通っていくわっ♪」

マリナ「これで喜ぶなんて……」

闇司祭「あら、引かないでもらえるかしら？　この毒液は精力剤と媚薬を兼ねたものなんだから、喜んで当然なのよ？」

マリナ「……確かに、立場が違えば喜んでもおかしくないわね」

マリナ（だけど、この薬は身体をおかしくする力のほうが強いわ。こいつだって、いまは余裕でもたくさん注いでいけば、いずれ私みたいになるに違いない。そこまでやるのよ。この狂人が、ひいひい泣いて、もう許してって言い出すまで責め尽くしてやるわ）

マリナ「溢れてきちゃったわね。とりあえず、ここまでかしら」

闇司祭「もっと入れてもいいのだけれど？」

マリナ「だったら、願い通りにしてあげる！ もっと注入器を奥まで突っ込んで……ほら、欲しかったお薬よ！ この無駄に大きいおちんちんで、ゴクゴク飲み込みなさい！」

闇司祭「ああんっ！ ああああっ！ んああんっ！ チンポが火傷しそうなほど熱い……っ！ 毒液、もつとお……もつと注いでえ……！」

マリナ「思ってたよりも、ずっとずっと欲しがりなおちんちんのね。SはMでもあるって言うけど、あなたの場合、それが当てはまってるみたい。ほらほら、膀胱が悲鳴をあげるまで注いであげるわ！」

闇司祭「んんんっ♪ 無理やり注がれちゃってるわ♪ 膀胱が悲鳴をあげるまで、なんて……やられた分は、きっちりやり返すつもりなのね……いいわ、見込んだ通りよ。いっぱい注いで、いっぱい気持ちよくして、あなたが言った通りの欲しがりチンポを射精させてっ♪」

マリナ「ドが付く変態ね、あなた……いいわ、もつと注いであげる！」

闇司祭「ああんっ♪ チンポ、注がれ過ぎておかしくなっちゃう……っ♪」

マリナ「本当に、どれだけ注いでも喜ぶのね。驚きだわ。おちんちんは、とっくに泣き出してるのに」

闇司祭「だってえ、気持ちいいんだもの♪　あなたは無理に我慢したから、この気持ちよさがわからなかったのよ」

マリナ「わかりたくもないわ……でも、あなたは喜ぶ人間みたいだから、身体がついていけないぐらいたっぷり射精できるようにしてあげる！」

闇司祭「あんっ……！　引き抜くのも強引……♪　でも、そうでなくてはね。せっかく、あなたに責めさせている意味がないわ」

【マリナ、闇司祭の股間へ移動】

マリナ「さあ、覚悟しなさい。あなたがしたように、お口でこのおちんちんを舐めるから」

闇司祭「舐けだなんて……♪　期待に胸が高鳴っちゃうわ♪」

マリナ「マゾ司祭め……一切手を抜くつもりはないから、三こそすり半で射精しないようにしなさい。もしそんな早く出ちゃうようなら、十回でも二十回でも射精させるから」

闇司祭「怖いわ。でも、楽しみ♪」

マリナ「へららず口なこと！　さっさと啞えちやったほうがいいわね……ああむっ、んじゅるっ、じゅるるるっ、ぢるるるるっ、じゅぷじゅぷじゅぷじゅぷ……じゅぷぷぷ

ぷうつ！」

闇司祭「あつ、んつ、ああつ、はああんつ……！ 最初から、激しい……っ！ 宣言通りね……私のチンポを、お口で攻撃してるわ……毒液でビンビンのチンポ、あなたのお口と唾液で犯されてる……っ！」

マリナ「じゅぐりゅつ、ぷじゅぐつ、んじゅるつ、れるつ、れるれるつ、れろろろつ、んじゅつ、じゅるるつ……！」

闇司祭「ひあああんつ、んあんつ、ああんつ、ああああつ、んんつ、ああああっ……！ 私との会話を、楽しむつもりは……んつ、あああつ、んつ……ないのね……んくつ、くふつ、くはっつ……一心不乱に……チンポの虜になったみたい……あくつ、あつ、んんっ！ ジュポジュポしちやつてる……っ！」

マリナ「んじゅるつ……あなたとの、じゅるつ、れるじゅつ、会話を楽しむ義務なんて……あむつ、はむあむつ、むぢゅりゅつ……ないでしょお……れるつ、じゅるるるつ、れるじゅつ、むじゅつ……！」

闇司祭「ないけれど……はあんつ、はつ、んつ、は、はっふ……！ せっかく啜えてくれるんだから……あつ、んいつ、いああっ……！ 楽しもうとしたっていいじゃない……っ！」

マリナ「黙りなさい……じゅるつ、れるるるつ、れろれろつ、んれろつ……へらず口が過

きたら……ちゅっ、ちゅずっ……じゅろじゅろっ……このおちんちん、歯で噛み切るわよ……ぢゅろぢゅろぢゅろっ！」

闇司祭「ひうつ、はああっ……噛み切られちゃうのは困るわ……私だって、チンポは……んんんっ！　そこそこっ！　喉奥で、亀頭を締め付けてえ……♪　ディープスロートお……喉でいじめてほしいのお……♪」

マリナ「とんだおねだりおちんちんだわ……じゅるっ、じゅろろろっ……この状況でおねだりしてくるなんて……だけど……れるじゅっ、ぢゅろろろろっ……そのおねだりには応えてあげない……代わりに……んぷああっ……はあはあ……あなたがフェラよりも欲しがってる、このお薬を注入してあげるわ……ほら、追加分よ！　奥までねじ込んで、たっぷり注いであげるっ！」

闇司祭「んおおおっ！　おおおっ！　おおおんっ！　チンポお……フェラでビクビクしてた敏感チンポにい、ドクドク注がれちゃってるう……！」

マリナ「溢れてきたけど、どうせもつと欲しいんでしょ！」

闇司祭「ひぐうつ！　それ以上は、注入器がチンポに入らない……っ！」

マリナ「入らなくても、押し潰されてるが好きなんでしょ！」

闇司祭「あああんっ♪　そうよお♪　チンポが気持ちよくて、もつと刺激してえ♪　って

身体がおねだりしちゃってるのお♪」

マリナ「だったら、この状態でえ……れろっ、れろれろっ、れろおおおっ！」

闇司祭「ああああああっ！ 注入してる最中に、ペロペロ舐めちゃダメえ……♪」

マリナ「ダメって割には、おちんちんが喜んでるわよ！ れろれろっ、れろっ、んれろおおっ、れろっ、んちゅっ、ちゅっ、ぴちやぴちや、れろろろっ、れろれろっ、んれろっ……！」

闇司祭「は、んっ、あっ、ああああっ！ チンポ、ビクビクしたいのに、奥まで注入器があっけビクビクできない……っ！」

マリナ「ビクビクしたいなら……んれろっ、れろろろっ、注入器を抜いてくださいってお願いしなさい！」

闇司祭「しますう……おねだりしますう……私のチンポに入っている注入器を……んおっ、おおおおっ、ほおおおんっ……！」

マリナ「れろれろれろれろっ！ 注入器を、どうして欲しいのかしら……れろろろろろっ、れろ、れろっ、れろろろろろっ！」

闇司祭「注入器を、抜いてくだひゃい……チンポを自由にさせてくだひゃい……ビクビク

できなくて、つらいんですう……」

マリナ「よくおねだりできたわね……ふふふっ、お望み通りに抜いてあげるわ……それっ！」

闇司祭「ああああああんっ！ あっ！ んっ！ ふああっ！ ひああああっ！」

マリナ「引き抜いただけで、射精してるみたいに跳ねてるわね。腰も浮いて、ブリッジみたいになつて……射精しないのが奇跡って思うくらいよ……ふふふっ」

闇司祭「こんなに……んっ、気持ちいいことしてるのに……ああっ……すぐに射精したらもったいないわ……んふう、ふう……たっぷり我慢して、気持ちいい射精をしたいのお……はあはあ……」

マリナ（いい感じに壊れてきたわね。でも、まだよ。私はもっとメチャクチャにされたんだから）

マリナ「……あれえ？ おちんちん、精液をおもらししてるじゃない。確か副作用だったわね。注ぎ過ぎて、早めに出ちやったのかしら」

闇司祭「これが副作用……ああああっ……もっと責めてえ……あなたにしたみたいに、いっぱいいじめてえ……♪」

マリナ「言われなくても、やってやるわよ！」

マリナ（医者とナースが来る気配はないわね。これなら、司祭をいじめることに集中できそう）

マリナ「欲しがりおちんちん、また啞えてあげるわ。お薬をたんまり入れてるから、出ないように気を付けなさい……はあむっ、ぢゅりゅぢゅずっ、ぢるるるっ、じゅろじゅろっ、はむじゅっ、んじゅるっ、あむあむあむあむっ……！」

闇司祭「ひぐっ、あっ、あ、ひんぐうっ……！ チンポ、さっきより敏感になつてえ……ああああ……！ らめえ……イっちゃいそう……！」

マリナ「我慢……れるじゅっ、するんじやなかったの……はぷじゅっ、ずじゅずじゅっ……欲しがりな上に、我慢もできないダメダメおちんちんだったのかしら……ぢゅるっ、じゅぷりゅっ、じゅばじゅばじゅばっ！」

闇司祭「我慢、しますう……んおっ、おおおっ……もっとお、チンポかわいがってもらえるように……がまんう、しまひゅう……あっ、んんっ、はあっ、んくっ……！」

マリナ「なにがあっても……ぢぷりゅりゅっ、じゅるぷっ、我慢できるのかしら……はぷじゅっ、じゅぐりゅっ、じゅろろろっ……」

闇司祭「なにがあっても……ひいひい……がまんう、しまひゅう……」

マリナ「そういうことならあ……んぷああっ……またお薬を注入してあげるわ！ほらっ！」

闇司祭「んぎいいいいいいっ！さっき注いだばっかりい……！」

マリナ「ドクドクいくわよ！」

闇司祭「ああああああああっ！らめえ……まだ、毒液がたつぷり、残って……ふうふうふうふう……！」

マリナ「なにがあっても我慢って言ったわよね！」

闇司祭「でもお、これはお薬だからあ……はあ、んんっ、ああああっ、ああああんっ！」

マリナ「んふふっ、今度は注入器が刺さっててもおかしましにビクビクしてるわね。間から精液が漏れて……じゅるるるう、れろっ、ド変態なおちんちんになってるわよ……れろっ、んれろっ」

闇司祭「らめえ……出ちやうう……お薬入れられて、出ちやうう……！いま以上、入れられたらあ……はあはあ……おかしく、なっちやう……もう、あなたに入れたのと同じくらい入ってるからあ……はあはあはあはあっ……」

マリナ「そう……じゃあ、一旦抜こうかしら」

闇司祭「ひぐっ……！ んくっ！ んんっ！ あああう！ 出るっ、出るっ……！
らめえ……我慢なお……ほおほお……」

マリナ「また耐えた……んふふっ、さすがはこのお薬を作った張本人ね。耐性が違うわ。
でも……あむっ、ぢるるるっ、ぢぷりゅりゅっ……！ この状態でフェラしたら、どこま
でもつかしらね……んじゅるるっ、じゅるるるっ、れるじゅっ……！」

闇司祭「ひいつ、あああぁっ、んおっ、おおおんっ……容赦ない……チンポ、メチャク
チャになってるのに……」

マリナ「ぴじゅぐりゅっ、んぶっ、んぷっ、じゅるるっ、れるじゅっ……そうね、注入器を
入れ過ぎて尿道口がパツクリ開いちやってるし、お口の中でもビクビク跳ねまくりだし、
オマケに……じゅるるるるっ！」

闇司祭「ひぎいっ！」

マリナ「この我慢汁と、おもらし精液。とても、まともな状態のおちんちんじゃないわ」

マリナ（最高。この司祭がよがってるだけで、いくらでもフェラできるわ。顎の疲れなん
て全然感じない。責め抜いて、私と同じく廃人みたいにしてやるわ！）

マリナ「ぢぷりゅりゅっ！　じゅるるっ！　れるじゅぐっ！　むじゅぐっ！」

闇司祭「んいっ……締め付けがあ、強くなつてえ……っ！」

マリナ「じゅりゅぐっ！　ぐじゅりゅっ！　ぢゅろぢゅろぢゅろっ！　それだけかしら……？」

闇司祭「ジュポジュポも、激しい……」

マリナ「そうでしょお……じゅりゅっ！　んじゅるるっ！　感じてることは、ちゃんと言いなさいって私に何度も言っただやない……じゅるぷっ、じゅるるっ、むじゅるっっ！」

闇司祭「でも……あう、んんっ……出ちやいそう、だからあ……はあ、はあ、はあ……」

マリナ「あなたでも……ぢるるるっ、んじゅるっ……出そうだと素直になりきれないのね……あむあむあむっ……意外だわ……ぢるるるっ、知りたくもなかったけど……はあああむっ、じゅるるるるるっ！」

闇司祭「ひいひいひいひいっ……イカ、せてえ……射精、させてえ……チンポ、限界いい……はあ、ふう、はあ……」

マリナ「耐えるって言ってたのに、やっぱりダメなの……？」

闇司祭「無理い……毒液、注入され過ぎたからあ……」

マリナ「そう、だったら……んぷあっ……最後にもっと注入してあげるわ！」

闇司祭「あぐつつつつ！ また注入器があ……！！」

マリナ「最後だから、たっぷり入れるわよ！」

闇司祭「んんぐうううっ……！！ ああああああああっ……！！」

マリナ「ほらほらほらっ！ 膀胱が破裂したって、注入し続けるわよ！」

闇司祭「イクっ……ああああっ！ お薬注入されたまま、いつちやうう……！！」

マリナ「この状態で射精しても、つらいだけじゃないの？ せめて、注入器を引き抜いてから射精したら？」

闇司祭「早く抜いてえ……じゃないと、このままいつちやう……！ チンポ、いつちやうのお……！！」

マリナ「それもおもしろいから、このまま注ぎ続けることにするわ」

闇司祭「んぎいいっ……そこまでは、してないのに……射精のときはあ、注入してなかったのに……ひい、ひい……」

マリナ「やられた分以上にやり返してなにが悪いの？　そもそも、これはあなたが言い出したことよ？　好きなだけ、お薬を使ってもいいと言ったわ」

闇司祭「だけ、どお……あつ、あ、んあつ、あくあつ……！　イクつ、らめえ、イクイクっ！　抜いてえ、抜いてえ……じゃない、とお……お薬、多過ぎてえ……はあ、はあ、はあ、はあ……」

マリナ「ふふふつ、だらんとしちやったわね。さすがのあなたでも、この量は許容範囲外だったってことかしら。でも、おちんちんだけはバキバキでビクビクしてる……引き抜いたら、その刺激で射精しそう」

闇司祭「はあ、はあ、はあ、はあ……んんう……らめえ……らめえ……はあ、はあ、はあ……」

マリナ「白目剥きそうね。じゃあ、本当に最後……この注入器で、尿道を愛撫してあげる！　ほらほらほらっ！」

闇司祭「んい……ああ……出るう……ああ……ああああ……ふああああ……」

マリナ「激しく動かしてるのに、喘ぎ声すら満足に出せなくなってるのね。いい気味だ

わ」

闇司祭「はあ、でるう……でるうう……でるううう……」

マリナ「出しなさい。注入器を抜いてあげるから」

闇司祭「でるう、でるううう……せーえきい、でるううう……」

マリナ「抜くわよ……そおれっ！」

闇司祭「んぐつつつつ……！ あああああっ！ 出て……んんんっ！」

マリナ「すっごい量……おちんちんだけ別の生き物みたいに跳ね回って……んっ！ こっちにもかかってきたわ……射精しても、私に迷惑をかけるおちんちんなのね」

闇司祭「あああつ、んんんうっ……はあ、はあ……射精、気持ちいい……ああ、んあああああつ、はああああつ……」

マリナ「そうでしょうね。これだけ出して、気持ちよくない人なんていないわ。しかも、このお薬の効き目は私も知ってる。あなたがいま、どういう状態になってるかも、手に取るようにわかるわ。身体力が全部抜かれて、おちんちんだけ異常に元気で、意識が遠のきそうなんですよ？」

闇司祭「気持ちいい……射精い……気持ちいい……はあ、はあ、はあ……」

マリナ「まるで聞いてないわね。全部、うわ言だわ」

マリナ（私もこうだった。それで、意識がプツリ切れた）

マリナ「そうだ。射精できた記念に、またお薬を注入してあげるわ。これ、精力回復の効果もあるんですよ？ だったら、いまのあなたにはピッタリなお薬よね？」

闇司祭「あう……ふう……んんう……ああ……」

マリナ「聞こえてない。一応了解は取ったし、注入しちやお……それ、ぶちゆう〜」

闇司祭「あああああああああつ！ チンポお……チンポお……あああああああつ……チンポお……ほお、ほお……あぐつ……」

マリナ「あら、動かなくなっちゃった。さすがにやりすぎたみたいね。でも、ちょうどいいはずよ。私だって、意識がなくなるまでお薬入れられて、何度も射精させられたんだから」

【マリナ、注入器を捨てる】

マリナ「動かないなら、いまのうちよ。妹を助けて、あのふたりの目を盗んで、ここから

……」

闇司祭「あああんっ……ああああっ……♪」

マリナ「なに……？」

闇司祭「んふふっ、んふふふふふっ♪ すっごく気持ちよかったわぁ♪」

【闇司祭、立ち上がる】

闇司祭「あなたを見込んで頼んだ甲斐があったわ♪」

マリナ（なんだか、雰囲気……なに？ 快樂責めにする前よりも不気味になってるんだけど……）

闇司祭「やっぱり、驚いてるわね」

マリナ「いまのは、全部演技だったって言うの……？」

闇司祭「いやねえ、違うわよぉ♪ いまのは、ぜーんぶ本当の反応よ。あなたに毒液を注がれまくって、抵抗すらできなくなっ、惨めに射精させられちゃったの」

マリナ「だ、だったら、その余裕は……」

闇司祭「これこそが、あなたに快樂責めを頼んだ理由よ。この毒液はねえ、一定量を超えて投与されて、効き目が強く出るとね、精力回復と媚薬の効果以外に、暴走状態になるの……こうしてねえ……」

マリナ「いやっ、待って、近づかないでっ！」

闇司祭「なに？ キスぐらいさせてくれてもいいじゃない。いままで散々、チンポをいじめ合った仲なんだから……あむっ、んちゅっ、ちゅっ、ちゅうう、んちゅっ、ちゅっ……」

マリナ「はぶっ、んぶっ、んぶぶっ……!!」

闇司祭「お口を閉じちゃ嫌よ？ キスなんだから、熱く、甘く、刺激的に……ほら、お口を開けなさい……んちゅっ、れるっ、れろろっ、ちゅっ、ちゅううっ……」

マリナ「んぶっっ！ んぶぶぶっ！ んあっ……んちゅっ、ちゅっ……れろろっ……んんっ！」

マリナ（暴走ってなによ。こんな効果が残されてたの？ 私、墓穴を掘っただけじゃない……!!）

闇司祭「ふあぁっ♪ んふふっ、いいキスだったわ。積極的にお口を開けて、舌を絡めて

くれたらもつとよかったけれど」